

古典日本語における動詞・形容詞の種類と活用

【動詞の種類】

	読む Vc	あり Vcr	往ぬ Vn	見る Vv	起く Vi	明く Ve	す・来 Vu
stem	YOM-	AR-	IN-	MI	OK-	AK-	S- K-
basis	YOMI	ARI	INI	MI	OKI	AKE	SI KI
vocalic stem							SE KO

【動詞の活用（一）：現在(present)】 語幹(stem)を使用

		子音動詞のグループ			母音動詞のグループ			不規則
		Vc	Vcr	Vn	Vv	Vi	Ve	Vu
basis	連用形	読み	あり	往に	見	起き	明け	し・き
finite	(Ru) 終止形	読む (u)	<u>あり</u> (-) basis	往ぬ (u)	見る (ru)	起く (u)	明く (u)	す (u) く (u)
adnominal	(URu) 連体形	読む (u)	ある (u)	往ぬる(uru)	見る (ru)	起くる(uru)	明くる(uru)	する(uru) くる(uru)
conditional	(URe) 已然形	読め (e)	あれ (e)	往ぬれ(ure)	見れ (re)	起くれ(ure)	明くれ(ure)	すれ(ure) くれ(ure)
hypothetical	(Aba) 未然形	読まば(aba)	あらば(aba)	往なば(aba)	見ば (ba)	<u>起きば</u> (ba) basis	<u>明けば</u> (ba) basis	<u>せば</u> (ba) * <u>こば</u> (ba) *
imperative	(e) 命令形	読め (e)	あれ (e)	往ね (e)	(見よ)	( <u>起きよ</u> )	( <u>明けよ</u> )	( <u>せよ</u> ) * ( <u>こよ</u> ) *

\* : vocalic stem

【動詞の活用（二）：過去(past)】 語基(basis)を使用

		Vc	Vcr	Vn	Vv	Vi	Ve	Vu
finite	(ki) 終止形	読みき	ありき	往にき	見き	起きき	明けき	しき ――
adnominal	(si) 連体形	読みし	ありし	往にし	見し	起きし	明けし	<u>せし</u> <u>きし</u> ・ <u>こし</u>
conditional	(sika) 已然形	読みしか	ありしか	往にしか	見しか	起きしか	明けしか	<u>せしか</u> <u>きしか</u> ・ <u>こしか</u>

【形容詞の活用（一）】

形容詞の活用形は、“finite present”, “adnominal present”, “conditional present”, “adverbial” の4つしかなく、動詞の活用形と比べて、欠けるところがある。その部分は、現代語の場合と同様、接尾動詞 /-kari/ (-vcr)による派生動詞を作って、その活用形を利用する：

		現在(present)		過去(past)	
		Ao 広	Asi 美し	Ao 広	Asi 美し
finite	(SI)	広し	美し	(広かりき)	(美しかりき)
adnominal	(ki)	広き (広かる)	美しき (美しかる)	(広かりし)	(美しかりし)
conditional	(kere)	広けれ (広かれど)	美しけれ (美しかれど)	(広かりしか)	(美しかりしか)
hypothetical		(広くば)	(美しくば)		
imperative		(広かれ)	(美しかれ)		
adverbial	(ku)	広く	美しく		

◎ 形容詞の完了は、「広かりけり/HIRO.kari.keri/」「美しかりけり/UTUKUSI.kari.keri/」。

【否定に固有の活用形】

否定に特有の活用形には、以下の3つのものがある。子音動詞のグループでは語幹(stem)が、母音動詞のグループでは語基(basis)が、そして不規則動詞では母音語幹(vocalic stem)が使われる：

	Vc	Vcr	Vn	Vv	Vi	Ve	Vu
finite (Azu) adverbial 連用形	読まず stem	あらず	往なず	見ず	起きず basis	明けず basis	せず* こず*
future (Azi)	読まじ	あらし	往なじ	見じ	起きじ	明けじ	せじ* こじ*
adverbial (Ade)	読まで	あらで	往なで	見で	起きで	明けで	せで* こで*

\* : vocalic stem

【動詞の活用表に対応する否定形（一）：現在(present)】

否定のその他の形は、接尾動詞 /-An.u/ および /-Azari/ (<- -Azu ARI) によって派生形として作られる：

	Vc	Vcr	Vn	Vv	Vi	Ve	Vu
basis	(読まざり)	(あらざり)	(往なざり)	(見ざり)	(起きざり)	(明けざり)	(せざり・こざり)
finite (Azu) 終止形	読まず <sup>z</sup>	あらず	往なず	見ず	起きず	明けず	せず <sup>z</sup> こず <sup>z</sup>
adnominal 連体形	(読まぬ) (読まざる)	(あらぬ) (あらざる)	(往なぬ) (往なざる)	(見ぬ) (見ざる)	(起きぬ) (起きざる)	(明けぬ) (明けざる)	(せぬ・せざる) (こぬ・こざる)
conditional 已然形	(読まね) (読まざれ)	(あらね) (あらざれ)	(往なね) (往なざれ)	(見ね) (見ざれ)	(起きね) (起きざれ)	(明けね) (明けざれ)	(せね・せざれ) (こね・こざれ)
hypothetical 未然形	(読まずば)	(あらずば)	(往なずば)	(見ずば)	(起きずば)	(明けずば)	(せずば) (こずば)
imperative 命令形	(読むな)* (読まざれ)	(あるな)? (あらざれ)	(往ぬな) (往なざれ)	(見るな) (見ざれ)	(起くな) (起きざれ)	(開くな) (明けざれ)	(すな・せざれ) (くな・こざれ)

\* 終助詞「な」のみの他に、「～な～そ」の形もある。

【動詞の活用表に対応する否定形（二）：過去(past)】

	Vc	Vcr	Vn	Vv	Vi	Ve	Vu
finite 終止形	(読まざりき)	(あらざりき)	(往なざりき)	(見ざりき)	(起きざりき)	(明けざりき)	(せざりき) (こざりき)
adnominal 連体形	(読まざりし)	(あらざりし)	(往なざりし)	(見ざりし)	(起きざりし)	(明けざりし)	(せざりし) (こざりし)
conditional 已然形	(読まざりしか)	(あらざりしか)	(往なざりしか)	(見ざりしか)	(起きざりしか)	(明けざりしか)	(せざりしか) (こざりしか)

【形容詞の活用・派生表に対応する否定形】

形容詞の否定も、接尾動詞 /-kari/ によって動詞化し、 /-An.u/ および /-Azari/ (<- -Azu ARI) によって作られる：

	現在(present)		過去(past)	
	Ao (広からざり)	Asi (美しからざり)	Ao (広からざりき)	Asi (美しからざりき)
basis				
finite	(広からず)	(美しからず)	(広からざりき)	(美しからざりき)
adnominal	(広からぬ・広からざる)	(美しからぬ・美しからざる)	(広からざりし)	(美しからざりし)
conditional	(広からね・広からざれ)	(美しからね・美しからざれ)	(広からざりしか)	(美しからざりしか)
hypothetical	(広からずば)	(美しからずば)		
imperative	(広からざれ)	(美しからざれ)		
adverbial	(広からず)	(美しからず)		

○ 形容詞の完了は、「広からざりけり/HIRO.kar.azari.keri/」「美しからざりけり/UTUKUSI.kar.azari.keri/」？

JP411 古典日本語における主な接尾詞と助詞

○ 接尾詞 (suffix)

I. Stem (子音動詞のグループ) ; Basis (母音動詞のグループ) ; Vocalic Stem (不規則動詞) を使用

/-An.u/ & /-Azu/	-vc* -f	nagation (連体・已然) (終止・「連用」)	現代語の/-An.u/(-vc) *終止形過去は /-Ananda/ (近世)
/-Azari/	-Vcr	nagation	現代語の/-Azaru/(-f)の語源
/-Asim.u/	-ve	causative	現代語の/-Asime.ru/(-vv)
/-Sas.u/	-ve	causative, honorative	現代語の/-Sas.u/(-vc), /-Sase.ru/(-vv)
/-Rar.u/	-ve	passive, potential, spontaneous, honorative	現代語の/-Re.ru/, /-Rare.ru/(-vv)

/-Am.u/ & /-Azi/	-vc* -f	future (終止・連体・已然) negated future	現代語の/-Yoo/(-f): 「~だろう」 現代語の「~まい」
/-Ama.si/	-v+f	irrealis	非現実: 現代語の/-Taroo/(-f)
/-Anz.u/	-Vu-z	future (<- "Am.u=to S.u")	「~するつもりだ」
/-Amafosi/	-asi	optative	「~したい」「~てほしい」

II. Stem (子音動詞グループ、母音動詞グループ) ; Vocalic Stem (不規則動詞「す」「来」) を使用

/-eri/	-Vcr	perfect	現代語の「~た」「~ている」
--------	------	---------	----------------

III. Basis を使用 (全ての動詞グループ)

/-t.u/	-ve	perfect	意志的な行為: 現代語の「~た」
/-n.u/	-ve	perfect	現象や出来事の描写: 現代語の「~た」
/-tari/	-Vcr	perfect (<- "te ARI")	現代語の「~た」「~ている」
/-keri/	-Vcr	past	伝承に基づく古い出来事: 「~た」
/-kem.u/	-vc	dubitative past	伝聞による過去の出来事: 「~たそうだ」
/-tasi/	-asi	voluntative	現代語の「~たい」

○ 助詞 (particle)

I. Finite present, negated finite present (\*Vcr では例外的に adnominal)

/=nari/	=Vcr	dubitative	伝聞: 「~と言う」「~と言われる」
/=meri/	=Vcr	dubitative	視覚情報に基づく推量: 「~のだろう」
/=ram.u/	=vc	dubitative	原因に関する推量: 「~からかもしれない」
/=be.si/	=ao	potential	状況からの論理的な判断: 「~のはずだ」
/=mazi/	=asi	neg. potential	状況からの論理的な判断: 「~ないはずだ」
/=bera/	=kni	dubitative	「~らしい」「~ように思える」

II. Finite (\*Vcr では例外的に adnominal)

/=tef.u/	=vc	dubitative (<- "=to if.u")	伝聞: 「~と言う」「~と言われる」
----------	-----	----------------------------	--------------------

III. N, K, M & V (adnominal)

/=nari/	=Vcr	(<- "=ni ARI")	「~である」「~のである」
/=tari/	=Vcr	(<- "=to ARI")	「~である」「~とした」「~としての」
/=goto.si/	=asi	comparative	「まるで~のようだ」「~に似ている」



## Super Express 古典語



### I 動詞の種類

#### ☆ 基本概念(1) 語幹と活用語尾

日本語の動詞には、ヨーロッパ言語の動詞と同じように活用(inflexion)があります。つまり、使い方にしたがって動詞の形が変わります。この場合、変化しない部分を語幹(stem)と呼び、変化する部分を活用語尾(flexive, ending)と呼びます。日本語の動詞をこの語幹と活用語尾に分けるためには、発音をアルファベットで書かなければなりません。その場合、語幹は大文字で、活用語尾は小文字で表記し、両者をドットで分けます。現代語の動詞をこの方法で分析すると以下ようになります：

第一グループ(Vc)		第二グループ(Vv)	不規則動詞(Vu)
①遊ぶ /ASOB.u/	⑥帰る /KAER.u/	①見る /MI.ru/	①する /S.uru/
②急ぐ /ISOG.u/	⑦貸す /KAS.u/	②食べる /TABE.ru/	②来る /K.uru/
③書く /KAK.u/	⑧待つ /MAT.u/		
④読む /YOM.u/	⑨買う /KA(W).u/		
⑤死ぬ /SIN.u/			

したがって活用語尾は第一グループでは/-u/、第二グループでは/-ru/、不規則動詞では/-uru/であることが分かります。

#### ☆ 基本概念(2) いわゆる「ます形」について

日本語教育で「ます形」と呼ばれているものは、学校文法では連用形といいます。この名前は「用言（動詞や形容詞）に連なる（続く）」という意味です。しかし言語学的には、動詞の語幹の一種と考えることができます。そこで語基(basis)と呼ぶことことにします。古典語には「～ます」はないので、「ます形」という名前は使えません。

さて、古典語の動詞も大きく分けて第一グループ、第二グループ、それに不規則動詞の3つに区別することができます。しかし現代語と違って、それぞれがさらに下位グループに分けられます。

1. まず第一グループです。これは3つの下位グループに区別されますが、ここではVc, Vcr, Vnという記号で表わします。Vcは、現代語の第一グループ（学校文法では五段活用動詞と呼ばれます）とほぼ同じで、学校文法では四段活用動詞と呼ばれます。VcrとVnはVcの例外で、その数は限られています。Vcrは学校文法ではラ行変格活用動詞（ラ変）、Vnはナ行変格活用動詞（ナ変）と呼ばれています。

2. 第二グループの動詞にも、3つの下位グループがあります。Vv, Vi, Veです。Vvは現代語の第二グループとほぼ同じです。学校文法ではさらに上一段活用動詞と下一段活用動詞の2つに分けられていますが、下一段動詞には「蹴る」という動詞1つしかありませんから、ここではまとめて記号Vvで表わすことにします。ViとVeは、現代語にない、古典語独

特のグループです。学校文法では上二段活用動詞、下二段活用動詞と呼ばれています。これら二段動詞では、終止形（文を終らせる形、dictionary form）の活用語尾が/-u/で、四段動詞と同じですが、それ以外の活用形は異なります。この二段動詞のうち、語基（連用形）が母音/i/で終るものがVi、母音/e/で終るものがVeです。

3. 不規則動詞の「する」と「来る」は、古典語では「す」と「く」です。学校文法では「す」をサ行変格活用動詞（サ変）、「く」を力行変格活用動詞（カ変）と呼んでいます。古典のサ変には「す」の外に、「～ず」となる動詞があります。例えば「演ず」「感ず」「信ず」「命ず」などです。現代語と同じように、「す／ず」「く」には、語幹、語基の外に、もう一つ特別な語幹の形「せ／ぜ」「こ」があります。これを母音語幹(vocalic stem)と呼びます。

## Ⅱ 動詞の活用形（第一表：現在）

古典日本語の動詞と形容詞では、その活用形を3つの表にまとめることができます。第一表が「現在」、第二表が「過去」、そして第三表が「否定」です。第一表「現在」には終止形、連体形、已然形、未然形、命令形の5つの活用形があります。

### 1. 終止形：/-Ru/

文を終わらせる形です。その活用語尾はVvの場合だけ/-ru/ですが、その他の動詞ではVcrを除いてすべて/-u/です。Vcrは例外で、終止形に連用形（語基）が使われます。

### 2. 連体形：/-URu/

動詞が名詞（体言）の前にあるときに使われる形です。現代語では終止形と同じですが、古典語では区別されます。Vc, Vcrの場合は/-u/、Vvでは/-ru/で、現代語の場合と違いありませんが、Vn, Vi, Ve, Vuでは/-uru/となります。

### 3. 已然形：/-URe/

これは現代語にはない形です。「既にある事実や状況」という意味です。普通はさらに助詞「は／ば」や「ど／ども」が続きます。例えば「雨降れば」は、現代語の「雨が降るので」や「雨が降ると」に当たり、「雨降れど」は現代語の「雨が降るが／降るけれど」に当たります。活用語尾はVc, Vcrでは/-e/、Vvでは/-re/、Vn, Vi, Ve, Vuでは/-ure/です。

### 4. 未然形：/-Aba/

これは現代語の「～ば」「～たら」の形に相当するもので、仮定条件を意味します。つまり「まだない事実や状況」です。活用語尾は第一グループ（Vc, Vcr, Vn）で/-aba/ですが、第二グループ（Vv, Vi, Ve）では語幹ではなく、語基（連用形）に/-ba/が付きます。不規則動詞では母音語幹に/-ba/が付きます。

### 5. 命令形：/-e/, /-yo/

第一グループ（Vc, Vcr, Vn）では現代語と同じように、語幹に活用語尾/-e/が付きますが、第二グループ（Vv, Vi, Ve）では語基（連用形）、不規則動詞では母音語幹に/-yo/が付きます。

## 実践練習 (一)

しんらん たんにしょう  
親鸞『歎異抄』－〔四〕

じ ひ しょうどう じょうど  
慈悲に 聖道 と 浄土 の か は り め あり。 聖道の 慈悲 と いふ は もの を あはれみ、  
かなしみ、 はぐくむ なり。 しかれども、 おもふ が ごとく たすけ と ぐる こと  
きはめて ありがたし。 また 浄土 の 慈悲 と いふ は、 念仏 して いそぎ 仏 と なりて  
大慈大悲心 を もて、 おもふ が ごとく 衆生 を 利益 する を いふ べき なり。 今生 に  
いかに 「いとほし、 不便 [なり] 」 と おもふ と も、 存知 の ごとく たすけ が たけ  
れば、 この 慈悲 始終 なし。 しかれば、 念仏 まうす の みぞ、 すえ と を り たる  
大慈悲心 に て さふらふ べき と、 云々。

あり	「あり」	Vcr	終止形現在	「ある」
いふ	「言ふ」	Vc	連体形現在	「言うもの／言うの」
あはれみ	「憐れむ」	Vc	語基（連用形）	「あわれみ」
かなしみ	「悲しむ」	Vc		
はぐくむ	「育む」	Vc		
おもふ	「思ふ」	Vc		
たすけ	「助く」	Ve		
とぐる	「遂ぐ」	Ve		
いふ	「言ふ」	Vc		
して	「す」	Vu	（語基/SI/に、接尾動詞/-t.u/の語基/-te/が付いたもの。）	
いそぎ	「急ぐ」	Vc		
なりて	「成る」	Vc		
もて	「持つ」	Vc	（「持ちて」の「ち」が省略されたもの。「以って」。）	
おもふ	「思ふ」	Vc		
する	「す」	Vu		
いふ	「言ふ」	Vc		
なり	「なり」	=vcr	（助動詞/=nari/の終止形現在。「～だ」「～である」）	
おもふ	「思ふ」	Vc		
たすけ	「助く」	Ve		
まうす	「申す」	Vc		
とをりたる	「通る」	Vc	（語基に接尾動詞/-tari/の連体形現在/-tar.u/が付いたもの。）	
さふらふ	「候ふ」	Vc	終止形現在	謙讓語丁寧語「～でございます」

### Ⅲ 動詞の活用形（第二表：過去）

動詞の活用形の第二表は「過去」です。この表には終止形、連体形、已然形の3つしかありません。第一グループと第二グループの動詞では語基（連用形）が使われ、不規則動詞では母音語幹が使われます。

1. 終止形：/-ki/
2. 連体形：/-si/
3. 已然形：/-sika/

なお、古代日本語には未然形（/-seba/）もあったようですが、平安時代以降には和歌でしか使われなくなりました。

### 実践練習（二）

どうげん しょうぼうがんでんぞうずいもんき  
**道元『正法眼蔵随聞記』第一（九）より**

や わ いは ろちゅうれん い しょうぐん へいげんくん あり よ ちょうてき  
 夜話に云く、昔魯仲連と云ふ將軍ありき。平原君が国に在て能く朝敵をたひらぐ。

しょう かずおおく しょうぐん じ いは た  
 平原君賞して数多の金銀等を与へしかば、魯仲連辞して云く、只だ將軍のみちなれば

う ため あら あへ  
 敵を能く討つのみなり、賞を得て物をとらん為に非ずと云ひて、敢て取らずと云ふ…

こきん わ かしゅう はるのうた  
**『古今和歌集』第一巻 春歌上 より**

そで  
 袖ひちて むすびし水の こほれるを 春立つけふの 風やとくらむ

きのつらゆき  
**紀貫之**

### Ⅳ 動詞の活用形（第三表：否定）

さて、第一表「現在」と第二表「過去」のあわせて8つの形が、動詞の最も基本的な活用形ですが、それらはすべて「肯定」です。それに対して「否定」を表わす特別の活用形が3つあります。第一グループでは語幹、第二グループでは語基、不規則動詞では母音語幹が使われます。

1. 否定の終止形・連用形一：/-Azu/ 「書も読まず、文も書かず。」
2. 否定の未来形・意志形：/-Azi/ 「書も読まじ。文も書かじ。」
3. 否定の連用形二：/-Ade/ 「書も読まで、文書くばかりなり。」

しかし、この3つの形のうち、基本の8つの形と重なるのは終止形/-Azu/だけです。それでは、残りの7つの形を否定するには、どうしたらよいでしょうか。この問題を解決するために、接尾動詞/-An.u/, /-Azari/を使った派生形(derivatives)が利用されます。

## V 動詞の派生形

### ☆ 基本概念(3) 活用と派生の違い

さて、これまで動詞の活用形を見てきましたが、それには現在の形（第一表）と過去の形（第二表）、それに否定の形の一部（第三表）がありました。しかし、これだけでは足りない場合があります。例えば、否定の形の場合がそうです。第三表の形だけでは、第一表および第二表の8つのうち、一つしか否定できません。また、未来や完了の形、それに現代語の「～ている」などの表現も、活用形だけでは作ることができません。こうした場合に、派生形が利用されます。

すでに説明したように、動詞の活用形は活用語尾が変わることによって作られました。その際に変化しないところが語幹でしたが、派生形とはこの語幹が変化するのです。言い換えれば、語幹に新しい部分が加わって、別の語幹が作られるのです。この新しい部分を接頭詞(prefix)、接尾詞(suffix)と言います。接頭詞は語幹の前に付き、接尾詞は語幹の後ろに付きます。日本語では古典語でも現代語でも、接尾詞が発達して、さまざまな種類があります。一番多いのは接尾動詞(suffix verb)と接尾名詞(suffix noun)で、その次が接尾形容詞(suffix adjective)です。以下では接尾動詞の使い方を説明します。

#### 1. 接尾動詞グループA

このグループの接尾動詞は、第一グループの動詞(Vc, Vcr, Vn)では語幹、第二グループの動詞(Vv, Vi, Ve)では語基、不規則動詞(Vu)では母音語幹「せ/ぜ」「こ」の後ろに付きます。/An.u/, /Am.u/, /Sas.u/, /Rar.u/などが、このグループの接尾動詞です。その際、次の2点に注意してください：

- ① それぞれの最初の文字が大文字で書かれている場合、その部分は取り除かれることがある。例えば/An.u/の最初の文字は母音の/A/である。第一グループの動詞の語幹は子音で終わっている。そこに接尾動詞/An.u/が付くときには、この母音の/A/は残る。しかし、第二グループの動詞に付くときは、語基が使われる。語基は母音で終わっているため、この母音の/A/は取り除かれる。その反対が/Sas.u/の場合である。その最初の文字は子音の/S/である。したがって、第一グループの動詞に付くときは、この子音の/S/は取り除かれる。それに対して第二グループの動詞に付くときは、この子音の/S/は残る。
- ② 接尾動詞自体も一般の動詞と同じく、-vc, -vcr, -veなどのグループに分けられる。そして各々のルールに従って活用する。

それでは、これらの接尾動詞が実際にどのように使われるか、見てみましょう：

	Vc	Vcr	Vv	Vi	Ve	Vu	
/An.u/	読まぬ	あらぬ	見ぬ	起きぬ	開けぬ	せぬ	来ぬ
/Am.u/	読まむ	あらむ	見む	起きむ	開けむ	せむ	来む
/Sas.u/	読ます	あらず	見さす	起きさす	開けさす	せさす	来さす
/Rar.u/	読まる	あらる	見らる	起きらる	開けらる	せらる	来らる

この表にあげられている形は、すべて終止形現在です。上記②でも触れたように、これらの派生動詞は、さらにそれぞれの動詞グループのルールにしたがって活用します。それを「読む」の場合を例にして示します：



Stem+flexive	/YOM.an.u/ (Vc)	/YOM.am.u/ (Vc)	/YOM.as.u/ (Ve)	/YOM.ar.u/ (Ve)
終止形	読まぬ → 読まず	読まむ	読ます	読まる
語基 (連用形)	読まに	読まみ	読ませ	読まれ
連体形	読まぬ	読まむ	読まする	読まるる
已然形	読まね (ば/ど)	読まめ (ば/ど)	読ますれ (ば/ど)	読まるれ (ば/ど)
未然形	読まなば	読ままば	読ませば	読まれば
命令形	読まね	読まめ	読ませよ	読まれよ
終止形過去			読ませき	読まれき
連体形過去			読ませし	読まれし
已然形過去			読ませしか (ば/ど)	読まれしか (ば/ど)

同様に、これらの接尾詞は重ねて使用することもできます。「書く」を例にすると、次のようになります：

Stem+flexive	/KAK.u/ (Vc)	/KAK.as.u/ (Ve)	/KAK.ase.rar.u/ (Ve)	/KAK.ase.rare.tamah.u/ (Vc)
終止形	書く	書かず	書かせらる	書かせられ給ふ
語基 (連用形)	書き	書かせ	書かせられ	書かせられ給ひ
連体形	書く	書かする	書かせらるる	書かせられ給ふ
已然形	書け (ば/ど)	書かすれ (ば/ど)	書かせらるれ (ば/ど)	書かせられ給へ (ば/ど)
未然形	書かば	書かせば	書かせられば	書かせられ給はば
命令形	書け	書かせよ	書かせられよ	書かせられ給へ
終止形過去	書きき	書かせき	書かせられき	書かせられ給ひき
連体形過去	書きし	書かせし	書かせられし	書かせられ給ひし
已然形過去	書きしか (ば/ど)	書かせしか (ば/ど)	書かせられしか (ば/ど)	書かせられ給ひしか (ば/ど)

## 2. 接尾動詞グループB

/-eri/ という接尾動詞は、第一グループの動詞と不規則動詞「す」にしか使われません。意味はグループCの/-tari/ と同じですから、第二グループの動詞には/-tari/ を使いません。

## 3. 接尾動詞グループC

完了を表わす接尾動詞には/-t.u/, /-n.u/, /-tari/, /-keri/ の4つがあります。これらの接尾動詞は、すべての動詞グループの語基に付きます。このうち、/-keri/ は、本来「伝承に基づく過去の形」であって、「完了」ではありませんが、形容詞の完了形には/-keri/ だけが使われ、他の接尾動詞は使われません。

## Ⅴ 形容詞

### ☆ 基本概念(4) 動詞と形容詞

日本語では、動詞と同様に形容詞も文を作ることができます。逆に、動詞も形容詞と同様に名詞を修飾することができます（連体形）。このように、動詞と形容詞はまったく同じ働きをします。つまり、動詞と形容詞は仲間なのです。これに対して、ヨーロッパ語などでは、形容詞は名詞の仲間ですから、形容詞だけでは文を作ることができません。

#### 1. 形容詞の活用形

古典日本語の動詞には、現在の形が5つ、過去の形が3つ、そして否定の形が3つありました。全部で11です。これに対して形容詞の活用形は5つあります。現在の終止形（「広し」）、連体形（「広き」）、已然形（「広ければ」）、未然形（「広くば」）、それに連用形（「広く」）です。このうち、動詞の活用形と共通なのは、連用形を除く4つです。

#### 2. 形容詞の動詞化（派生形による補完）

ところで、基本概念(4)で述べたように、日本語の動詞と形容詞は基本的に同じ働きをしますから、形容詞にも動詞と同じだけの形が必要になります。ところが、形容詞には動詞と共通の形が4つしかありませんから、7つ足りないことになります。つまり、現在の命令形、過去の終止・連体・已然形、それに否定の3つの形です（*/-Azu/*, */-Azi/*, */-Ade/*）。このうち、*/-Ade/*は「～をしない」という意味ですから、状態を表わす形容詞とは使われません。したがって、6つの形が足りないことになります。

そこで、これらの形は動詞の形を借りることにします。つまり「広し」を「広くあり」と考えて動詞の形に変えます。これが2語ですが、それを1語にして「広かり」とします。これは形容詞の語幹(stem)に接尾動詞/*-kari/* (*-vcr*)が付いた派生動詞です。そして、足りない形を作るのです。

現在と過去の否定の形も、同じようにして作ります。まず、派生動詞「広かり」の否定の終止形「広からず」を作ります。そして更に「広からず」は「広からずあり」と同じだと考えます。この2語を1語に縮小して「広からざり」という否定の派生動詞を作ります（これは「広くあらずあり」という3語を1語に縮小した形です）。そして、それを活用させます：

	肯定の形		否定の形	
	形容詞の活用形	動詞化「広かり」	動詞化「広かり」	動詞化「広からざり」
終止形現在	広し	(広かり)	広からず	
命令形		広かれ		広からざれ
連体形	広き	(広かる)		広からざる
已然形	広けれ (ば/ど)			広からざれ (ば/ど)
未然形	広くば		広からずば	
連用形	広く		広からず	
終止形過去		広かりき		広からざりき
連体形		広かりし		広からざりし
已然形		広かりしか (ば/ど)		広からざりしか (ば/ど)

これ以外に、「広からじ」という*/-Azi/*の形も考えられます。